
時の砂時計

黒野雄蓮路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の砂時計

【Nコード】

N8253A

【作者名】

黒野雄蓮路

【あらすじ】

どこにでもいる普通の高校生の如月太一は、ある時不思議な夢を見る。そのことがきっかけで太一は自分が生きている世界とはまた別の世界、パラレルワールドにとばされてしまう。そしてその世界で太一は様々なことを知る。別名『世界の寿命』と呼ばれる伝説の宝機、『時の砂時計』をめぐる旅が今始まる……。

第一章　プロローグ

ここはとある高等学校。全校生徒1527人と、結構規模の大きい学校だ。この学校は全国的にも有名な進学校で、他県からわざわざこの学校を受験しにくる人も少なくない。

生徒が皆クラス入室し終わった頃、一限目の授業のチャイムが鳴った。授業は出欠確認をとってから始まる。

「…片山、金本、如月、……ん？如月は来てないのか？如月太一……！」

先生が何度呼んでも返事はない。

「如月のヤツ、また遅刻だぜ。」

「ほつときなさいよ。いつものことよ。」

クラスの数人がヒソヒソと話している。どうやら如月太一という少年はクラス一の遅刻魔らしい。

一限目の授業も終わりに近づいた頃、外の自転車置き場から慌てた声が聞こえてきた。

「やばいやばいやばいー！！！！」

40分の大遅刻の末、太一が登校してきた。太一は階段を二段跳ばしで駆け上がり、途中に何度かこけながらなんとかクラスに着いた。

「…はあ、はあ、すみません。ちょっと遅れました。」

太一は息を切らして苦笑いしながら言った。どうやら言い訳する気力もないらしい。

「まったく……。まいどまいど懲りずに遅刻してからに。早く着席しなさい。」

先生は太一の遅刻が日常茶飯事になってしまっているのに呆れている。

「へっへっへっ、すいませんねえ。明日こそはちゃんと来るんで。」

太一はそう言って自分の席に座った。

明日が太一の人生を変えてしまう日とも知らずに……。

第二章　夢

太一は一限目の授業を聞こうともせず、席に座るやいなや腹を押さえて呻きだした。

「ぐっ、いつてえ……。腹がいてえ。」

アカデミー賞級の演技である。

「おいおい、大丈夫かよ太一。」

隣に座っているのは太一の親友の青木義彦だ。義彦は心配そうに太一に声をかけた。

「…なあに、ちよいと休めば平気さ。…先生、腹が痛いんで保健室行ってきます。」

太一は席を立ち、そそくさと教室を後にした。

「へっ、授業なんてうけてられっかよ。そもそも校長が自分の爺だからってムリヤリこんなトコ受験させんなっての。」

太一の祖父はこの学校だ。そのため父にここをムリヤリ受験させられたというわけだ。しかも主席で合格したというのだから驚きだ。人を見かけで判断してはいけないとはこのことである。

と、独り言をばやきながらも保健室に着いた。

「先生。ベッド借りまーす。」

そう言って太一はベッドにもぐりこみ、眠ってしまった。

やあ、ど・もこ・・ちは。

どこからか声が聞こえる。女の子の声のようだがノイズは激しくてうまく聞き取れない。

『…誰だ？』

誰・・・て気に・なく・・い・。こ・は君・・てい・夢だ。

『（なんなんだ？なんだか懐かしい声だ。）よく聞こえないよ。』

君と話・・・久し・・だ・ね。・・・はよ・・・して・のに。
『…何言ってるんだ？』

い・の間・・君と話せ・・なっ・・・だ。

『…なあ。』

ま・君・話せ・・・ったよ。

『…なあ、あんた…』

ど・・・らここ・は声が・・・・くい・・いね。ま・直接会い・行くよ。

『あんだ、誰なんだ？』

「お前は一体誰なんだ！」

太一はうなされて目が覚めた。額が汗だくになっている。

「如月、起きたの？調子はどう？うなされてたけど大丈夫？」

先生がカーテンを開けて入ってきた。手には古ぼけた小さい木箱を持っている。

「あ、大丈夫…です。」

太一は小さな声で答えた。太一の頭の中はさっきの夢のことではないだ。

「そう。じゃあもう下校時間過ぎてるから帰りなさい。友達も待ってるしね。」

部屋の入り口に目をやると、そこには義彦が立っていた。

「よっ。待ってたぜ。」

どうやらずっと太一の目が覚めるのを待ってくれていたらしい。「じゃあ、俺たち帰りますわ。ありがとございました。」

太一と義彦は部屋を出ようとした。

「あつ、如月待つて！」

先生は太一を呼び止めて古ぼけた小さい木箱を手渡した。

「あんたが寝てる間に女の子が来てね、『これをあの人が起きたら渡して下さい。』ってさ。夏だつてのに真つ黒のコート着ててフーッとで顔隠しててね。なんだか怪しい子だったわよ。」

「女の子……。：！」

太一はおもむろに木箱を開けた。信じられないがさっきの夢と何か関係していると思ったからだ。中には真新しい紙切れと剣の形をしたキーホルダーが入っていた。

「おい、どうしたんだ？」

義彦は太一に声をかけたが、太一は聞く耳を持たない。太一は真新しい紙切れを開いた。どうやら手紙のようだ。

『如月太一へ。久しぶり。私のこと、覚えてないよね。昔はよく話したのにな。夢からじゃうまく干渉できないのでまた直接会いに行きます。P・S キーホルダー、肌身離さず持つてね。それがあなたの導き手となるはずだから。』

間違いなかった。太一が見た夢と全く同じことが書かれていた。夢の声はノイズであり聞き取れなかったが、確かに手紙と同じことを話していた。

「なあ太一。早く帰ろうぜ。日が暮れちまうよ。」

義彦の一言で太一は我にかえった。

「あ、ああ……。ごめん。」

太一は胸に大きな不安を抱えて学校を後にした。

第三章　コート之女と砂時計

太一は歩きながらずっと夢のことを考えていた。なにより手紙に書いてある『直接会いに行きます。』というのが気になって仕方なかった。

「なあ、さっきからなに黙りこけてんだよ？あの紙になんか書いてたのか？」

義彦が太一の肩を叩いて言った。義彦はかなり心配しているようだ。

「あ、ああ…、なんでもないよ。へっへっへ。」

太一は笑って見せた。義彦に余計な心配をかけさせたくないからだ。

「ならいいんだけどな。じゃあ、俺こっちだから。じゃあな。」

太一と義彦は手を振って別れた。

太一は早く家に帰りたいかったので、商店街の中を通って帰ることにした。

太一は自転車を押して歩いている途中に、ある時計屋が目にとまった。腰に鍵と一緒に付けていた剣の形をしたキーホルダーが、鍵とあたってカチャンと音を鳴らした。すると太一はその場に自転車を置いてその店に吸い込まれるように入った。店の中は時計だらけだった。壁や棚に様々な時計が並んでいる。カチカチと鳴る針の音が不気味な程大きく聞こえる。

すると一つの砂時計が太一の目に止まった。透き通るような青い海色の砂が入った砂時計だ。太一はその砂時計をしばらく見た後、購入した。

「なんで俺、こんなもん買っちゃったんだ？」

太一は帰り道にぼつりと呟いた。

太一は砂時計を夕陽に照らしてみた。中の砂がきらきらと輝いている。太一が思わず見とれていると、少し先に人が立っているの気がついた。

『やばっ！変な人と思われてるかなあ。』

太一はバッグに砂時計を押し込んで顔を赤らめながらその場を立ち去ろうとした。

「見つけたよ。」

すると、すれ違い様にその人が口を開いた。

「……！！」

太一は驚いて振り返った。その人は女の声で真っ黒いコートを着ていてフードをすっぽり被っている。

「な、……あんたまさか。」

太一は腰が抜けてその場にしりもちをついた。間違いない。先生が言っていた女の子だ。

「な、なああんた……！」

太一が口を開いたその瞬間、太一の座っている地面が真つ黒い沼のようになった。太一はみるみるうちに飲み込まれていった。

どこからか声が聞こえる。

…めよ。

目覚めよ。

そなたは選ばれたのだ。

世界を救ってくれ。

世界を救うのだ、守護の剣に選ばれし者、ライオンハートよ！

「うわぁ！」

太一は目を覚ました。しかし、太一が目を覚ました場所は学校の帰り道ではなく、自分の家の自分のベッドの中だった。

「なーんだ。全部夢だったのか。」

太一はほっと胸をなで下ろしてベッドからでた。そして何気に枕元を見た。

「……!!」

太一は背筋が凍りき、声にならない悲鳴を上げた。枕元には、あのキーホルダーと砂時計が置かれていた。

第四章　届かぬ手

太一は家を後にして学校へと向かった。あのキーホルダーと砂時計を持って。しばらく自転車をこいでいると、太一は昨日コートの女に出会った道にさしかかった。

「確かここで…、あの女に会ったんだよな。」

太一はそう考えると気分が悪くなった。

チリーン。

その場所を通り過ぎる時、鈴の音が聞こえたような気がした。太一は全速力でその場を走り去った。

しばらくして太一は道を間違えたことに気がついた。今日は義彦を迎えに行く日である。義彦は毎週木曜日だけは母が自転車を使うので太一の後ろに乗って学校に行くのだ。太一は大急ぎで義彦の家に向かった。

義彦の家の手前の角を曲がると、義彦がこちらに向かって走ってきていた。

「やあ、ごめんごめん。お前んち寄るの忘れてた。」

太一は言った。しかし、義彦は太一の脇を走っていつてしまった。
太一は予想外の出来事に焦りながらも義彦を追いかけた。

「ちよつ、ちよつと待てよ。」

太一は義彦の前に回りこんだ。

「待てつてば。」

すると次の瞬間、あり得ないことが起こった。義彦が太一の体をすり抜けたのだ。

「え…、なんだよ…、これ。」

太一はその場に自転車を乗り捨て、義彦を追いかけた。

「義彦！ちよ待てつて！」

太一は義彦の肩を掴もうとした。しかしその手は義彦の肩をすり抜

けた。太一は地面に倒れ込んだ。

「つてえ……。なんなんだよ、これ。なにがどうなってんだよ！」

太一は地面を叩きながら叫んだ。前を見ると義彦がだんだんと遠ざかっていった。太一は義彦の方へいっばいに手を伸ばした。

太一はそこで気を失った。

第五章　暗闇の世界と光の扉

「どこだ、ここ……。」

太一は真っ暗な世界の底へゆつくりと沈んでいくのを感じた。

しばらくすると真っ暗な世界の底に着いた。足場まで真っ黒でこの世界がどこまで続いているのか全くわからない。

「真っ暗だ。何も見えないな。」

太一は真っ暗な世界を行くあてもなく歩き出した。しかし、いくら歩いても何も見えてこない。

しばらくして太一は足を止めた。足元からなにか気配を感じたからだ。太一は足元に目をやった。が、そこにはなにもなかった。

「気のせいかな。」

すると太一が歩きだそうとした瞬間、何かが太一の足を掴んだ。

「うわぁー！」

太一はその場に倒れた。

「つてえ。なんだ!？」

太一は再度足の方に目をやった。すると、姿は見えないが確かに何かがいるのを感じた。

「なにか、いるのか？」

確かにそこには何かがいる。しかし暗くて何も見えない。しかもだんだんと気配が強くなっている。

「う、うわぁ！」

太一は怖くなって逃げるように走り出した。走っても走っても背後に感じる気配は消えない。

「なんなんだ!？ いったい！」

すると遠くのほうに光が見えた。太一はそこに向かって全速力で走った。光のあった場所に着くと、そこにはもの凄く大きな扉があった。とてもじゃないが一人では開けそうもない。

「開け！開いてくれ!!!」

太一は扉を叩いて叫んだ。すると、太一は背後に大きな殺気を感じた。とうとう追いついてきたのだ。

「頼む、開いてくれえ！！！」

するとその大きな扉がかすかに開いた。それでも太一がくぐるには十分だった。太一はそのかすかな隙間に飛び込んだ。

第六章　モノクロワールドと死神

太一が光の扉の中に転がり込むと、そこは辺り一面モノクロの世界だった。

「つてえ、今度はどこだよ……。……！？」

すべてのものが色をすべて抜き取られたようなその世界の光景は、たしかに太一の記憶に色濃く残っている光景と同じだった。

「ここは……。学校じゃないか。」

太一はその場に立ち尽くした。後ろを振り返ると大きな光の扉が少しずつ閉まり始めていた。太一は今自分が立っている場所が、自分の知っている場所だったからなんとなく安堵感をおぼえたのか、思考が鈍っていた。太一が我にかえった頃にはもう扉は閉まっていた。

「ちよっ、待てって！」

しかし、時すでに遅し、扉はまばゆい光と共に消えてしまった。

「どつすりゃいいんだよ、これから……。」「

太一は仕方なくとぼとぼと歩き出した。

『一体どこなんだ、ここは？見た目は確かに学校だけど、なんか違うんだよなあ。色もないし音もしない。それにだれもいない。』

こんなことを考えていると、太一は無意識のうちに自分のクラスに足を運んでいた。

太一はそのクラスで、現実の自分のクラスとのある違いに気がついた。

「あれっ？俺の席がない……。」

そう、そのクラスには、本当のクラスなら当然のように置かれているはずの自分の机が無かった。

「なんで……？」

太一はクラスの真ん中の自分の机があるはずの位置に立って考え込んだ。

すると、突然クラスのドアがピシヤリと閉まった。太一はその音に一瞬びくつとした。そして次の瞬間、背中にまがまがしい殺気を感じた。

「だっ、誰だ……！！！」

太一は急いで距離をおき、相手の方に振り返った。

そこには裾がところどころ破けた粗末なフード付きの黒いマントを着た、ドクロの仮面が立っていた。ちょうど一般的な死神のような姿である。

「キサマノ持ッテイル『寿命』ヲヨコセ。サモナクバキサマヲ排除スル。」

「はっ！？『寿命』って何のことだよ……！！？」

太一は何がなんだかかわからずパニックになっていた。

「テイコウスルヤツハ排除スル！」

すると死神はマントから青白い手を出した。その手の爪は鋭いナイフのようになっていた。そしてじりじりと太一との距離を縮めていった。

「さては、お前さっきの暗い世界で俺のこと追っかけてきたヤツだな！！！」

太一は後退りしながら言った。だが死神は太一の言葉には耳もかさず、太一に向かって爪を振り下ろした。

「うあっち！！！」

太一はそれを間一髪のところまで右に避け、死神の後ろ側に回り込んだ。そしてまとわりつく恐怖心を振り払い、死神に渾身の一撃をくりだした。

「うわぁ！！！！」

だが、太一は死神の周りを覆う黒いオーラに弾き飛ばされてしまった。太一はクラスの奥の窓ガラスに叩きつけられた。その拍子に窓ガラスが割れて太一は真っ逆さまに落っこちた。

すると死神もその窓から飛び出し、ものすごいスピードで太一に追いついた。そして太一の方へ爪を思い切り突き出した。太一は思わ

ず目をつぶった。

そこで太一の記憶はいったん途切れた。多分気を失ってしまったのだろう。

だが、太一は気を失う直前に確かに誰かの声を聞いた。

そう、その声は確かに

「戦え。」

と言っていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8253a/>

時の砂時計

2010年12月10日14時51分発行